

ホッブズにおける学問的方法論の意義再考

吉 田 達 志

人文社会教室

(1985年9月7日受理)

Thomas Hobbes : The Significance of his Methodology of Science Reconsidered

Tatsushi YOSHIDA

Department of Humanities

(Received September 7, 1985)

Hobbes says in his work *Leviathan* : By philosophy is understood the knowledge acquired by reasoning, from the manner of the generation of any thing, to the properties : or from the properties, to some possible way of generation of the same; to the end to be able to produce, as far as matter, and human force permit, such effects, as human life requireth. By which definition it is evident, that we are not to account as any part thereof, that original knowledge called experience, in which consisteth prudence: because it is not attained by reasoning, but found as well in brute beasts, as in man; and is but a memory of successions of events in times past, wherein the omission of every little circumstance altering the effect, frustrateth the expectation of the most prudent: whereas nothing is produced by reasoning aright, but general, eternal, and immutable truth.

In the Bulletin of the Nagoya Institute of Technology Vol. 36, I considered the significance of Hobbes' methodology of science or philosophy which is based upon the right definition and reasoning. The aim of this paper is to reconsider this matter in all its aspects.

一. 序

『学報』前巻¹⁾において私は、ホッブズにおける学問的方法論の意義について論じたが、その目的は次の四点にあった。第一に、ホッブズが人間の思考を吟味することによって人間の認識能力をどのように把握しているのかを、換言すると経験的推論たる慎慮の不確かさとその狭隘性、それに対する理性的推論の確かさとその普遍性、そして後者の前者に対する優越性を検討すること。第二に、理性的推論に基づく論証過程を自然状態を中心にして具体的に追跡すること。第三に、経験的推論の世界と理性的推論の世界を架橋する要因とは何なのか、即ち人間の経験の中にありながら経験を越えていくような性格をもったものは、どのような人間の能力なのかを明らかにすること。最後に第四に、ホッブズは彼の政治科学ないしは政治哲学を実践に移し、人々に受け入れて貰うためにどのような具体的方策を提案しているのかを明らかにすること。本論文執筆後、私は特に第三点を中心にして再考し、検討し直すことの必要性を感じた。今回私が提示するこの小論は、前回発表した論文をもう一度考え直すという契機の中から誕生したものである。

ホッブズが描き出そうとした新しい人間像によれば、人間は何よりも先ずものごとの相を目的と手段の関係において眺め、その目的を達成していく「工作人」であって、政治的領域においては技術(art)を確立し、技術を用いることによって自らを製作者(artificer)とし、人間を素材(matter)として人工の人間、即ち国家(state)を創造するという。ホッブズによれば、技術に目的を達成させるための力を付与し、しかも人間によって一回限りではなく、普遍的に使用される可能性を与えるものは、科学(science)ないしは哲学(philosophy)と呼ばれる学問でなければならない。それは、目的と手段の関係を論理的原因と結果の関係に移し換える。つまり、目的の確実な入手は論理的原因と結果との結合の必然性を探究するか否かに懸ってくるのであって、科学ないしは哲学は、正確な定義(definition)と理性的推論(ratiocination)に依拠するが故に確実な学問として、論理的な因果関係の必然性を保証するのである。この論理的な因果関係の必然性に関する注目すべき特徴は、後に見るように、それが人間自らによって作り出され、生成されていくものであるとされている点にある。こうして、技術は確実な学問に裏打ちされることによって始めて、その有用性を獲得するのである。従って問題は、我々はこうした性格

を有する科学ないしは哲学をどのようにしたら手に入れることができるのか、ということである。

ところで、ホッブズは、推論を経験的推論²⁾、即ち慎慮(prudence)と理性的推論との二つに明確に区別することの必要性和後者の前者に対する優越性を強調している。両者の間には一見して深い断絶ないしは乖離が見られる。ホッブズによれば、慎慮は不確実な知識である。というのは、結果を変更しうるあらゆる条件を経験によって観察し、回想することは不可能だからである。これに対して、ある人があるものごとについての真理を他人に向けて明瞭に論証しうる場合には、科学ないしは哲学は確実無謬な知識であると言いうるのである³⁾。『物体論』において、ホッブズは哲学を次のように定義している。「哲学とは、我々が先ず、結果または現象の原因ないしは生成について有している知識から真の理性的推論によって我々が獲得するような、結果または現象についての知識のことであり、更に先ず、原因または生成の結果を知ることから得られるような、原因または生成についての知識のことであり⁴⁾」。

要するに哲学とは、ある既知の原因からその結果を、或いはある既知の結果からその原因を探究する際に、この探究過程が理性的推論に依拠している場合に成立する学問的知識のことであり。従って、そこからは確実で不変の真理が生み出される。これに対して、慎慮は過去の出来事の継続についての単なる記憶に基礎を置いているにすぎないから当てにはならない。従って、慎慮に依拠する経験的知識は不確実な知識として哲学から除外される。その他、誤まった教義、超自然的啓示に基づく知識、それに著作家達の評判をあてにし、そこから引き出された知識、これらも同様に不確実な知識として哲学から排除される。

それでは、確実な知識としての科学ないしは哲学は、どのようにして発見され、何を目的とし、何に基礎を置いて樹立されたのか、という点について『市民論』を中心に考察してみよう⁵⁾。

ホッブズにおける科学ないしは哲学的方法的特徴は、「すべての自然科学の母である幾何学」の圧倒的な影響を受けている点にある⁶⁾。つまり、幾何学は正確な定義と推論に依拠する最も精密な科学であって、幾何学が依拠する方法がものごとについての因果関係、即ち原因と結果の連鎖を探るという目的に適用されるのである⁷⁾。定義と推論の正確さに基づく幾何学の確固不動の方法が人間の行為についての因果関係の解明に適用されると、そこに科学ないしは哲学が誕生する。それが人間の恣意によって勝手に動かされえない厳密な知識として成立するためには、因果関係解明への旅においてその出発点、経路、到達点に至る各要素が正確な定義に基づいて正し

く確定され、正確な推論に基づいて正しく配列されなければならない。換言すると、我々が正確な定義によって先ず原因を確定要素——ホッブズはこれを原理(principle)と呼ぶ——として決定し、正確な推論によって確定要素間の因果関係を論証する(demonstration)ということである⁸⁾。この場合、要素の確定化とは、同時に要素の数量化を意味していて、計算能力としての理性的推論がすべての確定要素を量的なものとして捉えて計算を押し進めていくのである。従って、この計算過程が推論に外ならない。

この因果関係の探究において原因を確定要素、即ち原理として決定する作業は、実はむしろ結果から原因を予め発見するという作業を前提に行われる。つまり、ある結果からある原因へと流れを遡ることによってその原因を確定要素＝原理として確定し、今度は確定された原因＝原理から正確な推論に従って確固たる結果＝原理へと流れを辿ろうというのである。これがホッブズにおける、いわゆる分析的・総合的方法と言われるものである。この方法によって発見され、確定された原理は藤原氏の指摘するように「それ自体において知られる、自明の原理⁹⁾」であり、従ってそれは疑うことを許さない、また、争う余地のない、決定的で確実なものという性格を有していて、第一義的には経験的事実に基づく証明を必要とはしない¹⁰⁾。それは論理的な思考実験の結果、知られ、発見されたものである。この分析的総合的方法は、自然科学におけるような仮説を実験に基づいて証明するという方法とは異なる。つまり、ホッブズにおける科学ないしは哲学は、自然科学的な事実の発見を目的とする知識として成立することを求めているのではなく、事実から事実への関係を明らかにする知識として成立することを求めているのである。ホッブズによれば、正確な推論は正しい理性(right reason)を行使することによってなされるのであり、正しい理性とは「特別の、真の理性的推論のことであり¹¹⁾」と定義されている。これが科学ないしは哲学を成り立たせるのである。このように見てくると、慎慮とは各個人の理性、即ち各人によって私的に行使される理性を意味するにすぎず、従ってそれは理性的推論が備えている公共性という意味での普遍的性格を備えてはいないということが理解されるのである。

科学ないしは哲学が政治的領域に適用されると、それは政治科学ないしは政治哲学と呼ばれる¹²⁾。従って、人間を製作者とし、人間を素材として国家を創造する一連の技術過程は、正確な定義によって確定された、何人も疑いえず自明の原理と正確な推論に立脚する政治科学ないしは政治哲学に支えられてすすめられていくということになる。そしてこの場合、「内乱の原因は人々が戦争の原因と平和のそれを知らない点にある¹³⁾」から、その原因を

探究する前提として、先ず一定の秩序が失われてしまったと仮定する思考実験によって平和を阻害する原因が探究される。いかなる原因が平和の攪乱という結果をもたらすのか。

こうして、ホッブズは平和を妨げる直接的原因を正義をめぐる人間の闘争に見出し、更にその究極的原因を人間の本性のうちに潜む闘争への意志に見出して、それを原理として確定した。次に、このようにして確定された原理を出発点とし、確固たる平和という原理を到達点として正確な定義と推論に基づく政治科学ないしは政治哲学による論証が展開されていくが、その間の経路における各原理——それは、後の原理に対しては原因という、前の原理に対しては結果という関係にある——は、暴力による死の危険から免れて生命の安全を確保するためにはいかなる手段が必要であるのか、ということを検討しながら確定されていくのである。

二、 慎慮対理性的推論

ホッブズは、人生に立向う人間の基本的姿勢を、日常生活において遭遇する出来事についての因果関係を探る態度のうちに捉えている。「人間の本性に特有なものは彼らの目に触れる出来事の原因について探究的であるということであって、これは人によって程度の差はあるが、少なくとも人間である以上あらゆる人々は、自分自身の運・不運の原因を探すほどの好奇心は持ち合わせているものである¹⁴⁾」

けれども、人間は何もしないでいて、出来事についての因果関係を確実に把握するなんらかの方法を知りうるはずがないから、むしろ探究心故にかえって将来への期待と不安の間で苦しみ、悩むことを余儀なくされている存在なのである。人間は、いかにしたら因果関係の蓋然性しか把握しえない知識から脱却して、その必然性を把握しうる知識へ到達し、それによって正確に将来を予見して自分の人生を確実に歩んでいくことが可能になるのであろうか。ホッブズは自然哲学の立場から人間の認識能力の分析を行っているが、この作業は人間の思考を吟味することから始まる¹⁵⁾。

人間は感覚に作用していないものを表す思考を抱くことはできず、心に浮かぶ概念はすべて感覚器官に生じたものであるから、結局、あらゆる思考の起源は感覚にある。ホッブズによれば、思考の系列とは思考が次々に継起することを指すが、そこにはある一定の連続性が認められる。それは、思考の系列がある意欲や企図によって規制されている場合であって、ホッブズはこれを規制された思考の系列と呼ぶ。これには二種類あって、一つは、想像されたある結果について我々がそれを生む原因や手

段を探す場合であり、これは人間と動物の双方によって共有されている。もう一つは、何かあるものを想像して我々がそれによって生じさせられうるあらゆる可能な結果を探す場合、即ち我々がそれを所有したならばそれによってなしうることを想像する場合である。この探究への意欲が好奇心(*curiosity*)と呼ばれ、人間にのみ特有なものである。つまり、規制された思考とは探究(*seeking*)ないしは発見する能力(*the faculty of invention*)に外ならず、これは現在または過去のある結果の原因を、或いは現在または過去のある原因の結果を追究することを意味しているのである。

こうしてホッブズによれば、人間は、いわば知的好奇心に動かされて出来事についての因果関係を探ろうとする存在であるが、例えば人間がある行為の結果を知ろうとして何か過去のそれに類似した行為とその結果とを次から次へと考えるのは、彼が類似の行為には類似の結果が付随するであろうと想定しているからである。この種の思考は慎慮とか、予見(*foresight*)とか、知恵(*wisdom*)とか呼ばれ、それは推論能力を意味している。慎慮は、我々が豊富な経験を有していれば確実性を増し、時には結果が予測に合致する場合もあるが、それでも十分な確実性を有しているわけではない。慎慮は、過去の経験から引き出された未来についての推定(*presumption*)にすぎない。同様に、過去の出来事についての推定が未来の出来事からではなく、同じく過去の他の出来事から引き出されてくることもあるが、そうした推定はどちらの場合も経験にのみ基づいているが故に不確実なものなのである。

ところで、ホッブズによれば人間にのみ固有な推論能力である理性的推論は、研究と努力によって後天的に獲得されたものであるという。つまり、人間を高次の段階にまで進歩させたこの新しい人間の能力は、言葉(*speech*)の発明によって生じたものである。言葉の一般的効用は我々の思考(*thoughts*)の系列を語(*words*)の系列に移し換える点にあるのであって、その目的の一つは、我々の思考の連続を記録することによって思い出すための苦労を省くためであり、もう一つは、多くの人々が同じ語をその結合と語順によって、彼らがそれぞれの事柄について何を考えているかを相互に表わすためである。更に言葉の特殊な効用は第一に、思考活動によって我々が現在または過去のものごとが結果としてもたらすであろうと認めたものを記録すること、第二に、我々が既に得ている知識を他人に示して相互に助言し、教えること、第三に、我々の意志と目的とを他人に知らせて、我々が相互に助け合えるようにすることである。

言葉が原因と結果の連続についての回想に役立つのは、名辞(*names*)の付与とそれらの結合とによる。名辞の付与

によって我々は、想像されたものごとの論理的帰結に関する計算を名辞の論理的帰結に関する計算に転化させる。つまり、一つの特例な事例において見出された帰結を普遍的法則として記録し、回想することによって、ここで現在真実であると発見されたものをすべての時と所においても通用する真実たらしめるのである。二つの名辞が結合されると、それは帰結または断定となる。そして、真偽は言葉の属性であって、ものごとの属性ではないから言葉のないところには真実も虚偽も存在しない。従って、真実とは我々が断定する際に諸名辞を正確に配列するか否かに懸っているということになる。

以上のことを要約して言えば、理性的推論とは我々の思考を記号づけ、表わすために協定された一般的諸名辞の連続についての計算に外ならない。記号づけるというのは、我々自身で計算する場合であり、表わすというのは、我々の計算を他人に示し、証明する場合である。理性的推論は感覚や記憶のように我々に生まれつき備わっているものではなく、また、慎慮のように経験のみによって得られるものでもなく、それは第一に、適切な名辞の付与によって、第二に、優れた整然とした方法を得ることによって、名辞から出発してそれらのうちのある名辞と他の名辞との結合から作られる様々の断定に達し、それから一つの断定と他の断定との結合である三段論法(syllogisms)に達し、遂に我々が当面の問題に関するすべての名辞の連続関係についての知識に到達するという努力を払うことによって獲得される。従って、我々が真理に到達するためには、我々が断定する際に諸名辞を正確に配列することが必要となる。こうして獲得された理性的推論に依拠しているものが科学なのである。

慎慮と理性的推論に基づく科学ないしは哲学とは明確に区別されなければならない。慎慮は過去の取り消しえない事実についての知識に外ならず、その意味でそれは事実に関する絶対的知識として成立するが、科学ないしは哲学は一つの事実の他の事実への連続と依存関係についての知識として、換言すると一つの断定の他の断定への連続に関する条件的知識として成立するのである。我々は後者によって、自分が現在なしうることから何か他のことを他の時にしようと欲したりする場合に、いかにそれをなしたらよいか、その実現方法を知るのである。なぜならば、我々があるものごとがいかなる原因によって、また、いかなる仕方でもどのようにして生ずるのかということを知るならば、類似の原因が我々の力の支配下に入ってきた場合に、どうしたらそれと類似の結果を生じさせるか、ということが分るからである。しかし、推論が間違った結論に達した場合、それは背理(absurdity)と呼ばれ、その原因は推論を正確な定義から出発させて展開していない点にある。

さて、科学ないしは哲学の立場から人間の善悪の問題を分析すると次のようになる¹⁶⁾。

動物には二種類の運動がある。運動には生物的代謝を意味する生命的運動と人間が予め心に想像した通りに行為する動物的運動とがあり、後者は意志的運動とも呼ばれる。この意志的運動はそれに先行する「どこへ」、「いかにして」、「何を」という思考に依存しているから、想像がすべての意志的運動の最初の内的な発端である。最初の発端は努力と呼ばれる。この努力がそれを惹き起こすものに向う時には欲求と呼ばれ、また、努力があるものから離れようとする時には嫌悪と呼ばれる。欲求は経験から、更には予見から生ずる。そして、人間の体質は絶えず変化しているから全く同じものが常に同じ欲求や嫌悪を惹き起こすということとはできないし、ましてや同じものに対する欲求においてすべての人々が一致することとはありえないから、ある人の欲求の対象がその人にとって善であり、嫌悪の対象がその人にとって悪である。換言すると、善悪という言葉は常にそれを用いる人との関連において使用されるものであって、絶対的な善だとか、絶対的な悪だとかいうようなものは存在しないし、また、善悪の一般的規準というものも存在しない。生命活動を助長し、強化するものが欲求であり、それが善となる。生命活動を妨げるものが嫌悪であり、それが悪となる。欲求と嫌悪はその具体的な表れ方に応じて様々な名辞をもつが、これらの名辞は情念という名辞の下に統括される。

人間の心の中に同一のものごとに関する欲求と嫌悪が交互に生じて、ものごとが行われるまで、或いは不可能と考えられるまで継続する欲求、嫌悪の総計は熟慮(deliberation)と呼ばれる。そして人間と同様、獣もまた熟慮する。熟慮において行為、或いはその回避に直接継続する最後の欲求または嫌悪は、我々が意志と呼ぶものの、即ち意志するという行為である。つまり、意志が熟慮における最後の欲求である。

ところで、善悪に関する熟慮の際に交互に起こる欲求に当るものは、過去及び未来についての真理の究明に際しては交互に起こる意見(opinion)がそれである。熟慮における最後の欲求が意志と呼ばれるように、真理の究明における最終の意見は判断(judgement)と呼ばれる。そして、善悪に関する問題において交互に起こる欲求の全連鎖が熟慮と呼ばれるように、真偽に関する問題において交互に起こる意見の全連鎖は疑問(doubt)と呼ばれる。けれども、いかなる論究も絶対的知識として終結することはできず、条件的知識としてしか終結することができない。つまり、論究によっては、もしもこれがあるならばあれがあり、これがあったならばあれがあったのであり、これがあるだろうとすればあれもあるだろうという

具合に条件的にしか知りうるにすぎないし、また、あるものと他のものとの関連ではなく、あるものの名辞とそれと同じものの別の名辞との関連を知りうるにすぎない。それ故、論究が言葉で表わされて、語の定義から始まり、語の結合によって一般的断定にすすみ、更にこれらの結合によって三段論法へとすすむという場合に、終結、即ち最後の総計は結論(conclusion)と呼ばれる。こうした性格をもった知識が科学と呼ばれるのである。

しかしながら、このような論究の最初の基礎が定義の上に置かれていなかったり、或いはそれらの定義が三段論法を作るに際して正確に結合されていない場合には、その終結即ち結論は再び意見になってしまう。つまり、ある人によって述べられたことが真実だと主張されていたとしても、それが時に背理的で無意味な語で述べられていて理解不可能な場合には、それは真実についての意見にすぎないということである。

こうして、ホッブズにおいては慎慮と理性的推論とは相対立すること、及び後者の前者に対する優越性が主張されたのであるが、それでは両者はどこまでも平行線を辿るのであろうか。ホッブズ自身は後者を行う能力を有しているという点はさておいて、ホッブズによれば指導と訓練によって一般の人々も高度な推論能力を獲得することが可能であるとされているから、理性的推論を行使しうる可能性が万人に与えられているし、実際にそれを獲得するための道が開かれているということになる。従って、両者の接点という問題、即ちどのような人間の能力を契機として人間は前者の軌を脱して後者の場へと参入することができるようになるのか、換言すると、推論過程の蓋然性を必然性にまで高める契機となりうる人間の能力とは何なのか、という問題が提起されてよいはずである。そのような人間の能力とは、人間の経験のうちにあって、しかも経験を越え出ているような性格を有していなければならないであろう。

三、慎慮と理性的推論の接点

推論過程の蓋然性とその必然性を媒介する役割を果たす人間の能力とはどのようなものなのか。このような問題を提起することが理論的に可能であるとしても、それは、この問題に関してホッブズが実際に明確な考察を行っているということを意味しているわけではない。福田氏は、ホッブズにおいて「高次の論理的能力が何ら自覚的に問われていない」¹⁷⁾と指摘した後、更に次のように述べている。「人間の認識についてのホッブズの理論は、個体としての人間の生物的生存、すなわち生理(=代謝)過程に根をおろしながら、言語の使用によって人間を所与

性から超越させて一挙に無限の認識過程の創造者に飛躍せしめた。この場合飛躍が極めてドラスチックであるにもかかわらず、彼自身十分これを論理化しなかった点で、ホッブズの認識論はしばしば矛盾を指摘せられてきた¹⁸⁾。」

こうして、ホッブズにおいては慎慮から理性的推論へと移行させる役割を果たすはずの人間の能力についての考察が、ほとんどその著作の中に見出されないのである。わずかに岸畑氏が、『リヴァイアサン』、第一部、「人間について」、第三章、「想像の継続または連続について」の箇所に注目して、因果的な思考の連続を発見する能力としての想像力が感覚を理性へ媒介する役割をもつと指摘しているにすぎない¹⁹⁾。なるほど優れた想像力という、因果関係を推論する人間の能力が慎慮と理性的推論とをつなぐ役割を演じていることを認めてもよいであろう。けれども、推論過程の必然性は、推論が適切な定義から出発して展開されているかどうかにも懸っているが、いかなる人間の能力が適切な定義を与えるのか、という点についてのホッブズの考察を我々はどこにも明瞭に見出すことができないのである²⁰⁾。ともあれ、我々は、慎慮と理性的推論との間に橋を架けるという仕事は、二つの人間の能力即ち因果関係を発見する能力と定義を行う能力との協力によって可能になると一応言うことができよう。

ところで、既にホッブズがトゥキディデースの著作『ペロポネソス戦争史』翻訳の序文の中で「歴史の主要な、真の仕事は、過去の行為についての知識によって現在においては思慮深く、未来に対しては先見の明あるように人々を教化し、能力を与えることにある²¹⁾」と述べている点に表れているように、ここには人間の行為についての因果関係の必然性を探究しようとする問題関心が見られる²²⁾。思慮、先見の明とは、歴史的知識に依拠して人間の行為についての因果関係を類推する推論能力を意味しているから、これを歴史的推論と名づけることにしよう。こうして、因果関係における必然性を探究するための努力は、ホッブズの言葉を用いるならば精神的情欲にも等しい知的好奇心に促されて、慎慮、即ち経験的推論から歴史的推論へ、歴史的推論から理性的推論へという一連の過程を経ることによって実を結んだと見てよいであろう。この過程において最終的な理性的推論に到達させる橋渡しの役割を担った人間の能力が、因果関係を発見する能力と定義を行う能力とであったと言えよう。ホッブズの理論において、こうした形で慎慮と理性的推論との間に架橋しようとする試みがなされているのであって、その努力の軌跡に我々の注意が向けられるべきである。

さて、最終的に理性的推論が獲得されたからには、次の問題はそれに裏付けられた政治科学ないしは政治哲学という学問が、具体的にどのようにして平和の確立に至る一連の過程を生成し、論証しようとしているのか、そ

れが依拠する原理と推論過程を追跡して明らかにすることである。ここでは、自然状態を中心にして簡単に述べるにとどめたい。いかなる原因＝原理が自然状態という結果＝原理をもたらすのか、また、いかなる原因＝原理が自然状態から脱出させて平和という結果＝原理を導くのか、という問題を解明してみたい²³⁾。

ホッブズは出発点としての最初の原因を人間の至福(felicity)に求め、それを原理として確定した。ホッブズは至福を次のように定義する。「至福とは一つの対象から他の対象への意欲の継続的な進行であって、前者の獲得はなお後者への過程にすぎない。その原因は、人間の意欲の目的が一度きりの、或いは一瞬だけの享受にあるのではなく、彼の将来の意欲が辿る道を永遠に確保することにあるからである²⁴⁾。」つまり、人間とは絶えず生命活動の拡大を求めている存在であって、至福とは生命活動の最大発揮と満足を意味している。至福を求める人間の意欲は絶えず次から次へと力を求めて休止することがないが、その原因は必ずしも人間が既に得ているものよりもより強烈な歓喜を望むということではなくて、また、彼が並の力に満足することができないということでもなくて、彼が現在所有している安楽に生きるための力を確保しうするためには、それを更にそれ以上獲得しておかなければならないという点にある。そこで、第二の原理として力(power)が確定される。力とは、近い将来に明らかに善になると思われるものを獲得するために人間が現在所有している手段のことである。こうして、人間は至福を与えてくれるものを善と見なして、それを力によって獲得しようと狂奔する。ここから自然状態という結果がもたらされ、ホッブズはそれを戦争状態という内容をもった原理として確定する。つまり、人間の本性のうちに潜む情念(ホッブズは三つの主要な要因、即ち競争、不信、誇りを挙げている)と人間相互間の身心の能力の平等(肉体的力と推論能力における平等)という原因が相まって、万人の万人に対する戦争状態を内容とする自然状態という結果を惹き起こす。そこでは暴力による死の危険にさらされる。けれども、それを免れ、生命の安全を確保するための手段＝原因があり、それによって自然状態を逃れ、平和という目的＝結果を導き出すことが可能になる。一つは情念の中での最強の情念、即ち暴力による死への恐怖心(fear)であり、もう一つは理性的推論であって、ホッブズはこれらを原理として確定した。前者は平和を求める気持を生み出し、後者は人々が同意する気になれるような平和の条件、即ち自然法を示唆する。こうして、人々は国家状態へと移行し、平和な状態を作り出していくのである。

ここで再び、学問的知識を樹立することによって経験的知識を克服するという問題に戻ろう。今度は、人間の

論理的徹底化の気構という精神的態度が、因果関係の必然性が究明される際に果している役割に焦点を絞って、その意義について考えてみたい。なぜならば、ホッブズにおいては、ものごとについての真理というものは、我々がそのものごとを完全に理解することによって獲得されるものであり、完全な理解とはものごとについての因果関係の必然性を徹底的に究めることによってはじめて達成されるものであって、その際、この究明過程をダイナミックに推進していく原動力となるのが論理的徹底化の気構だからである。これこそが、最初の原理から出発した推論を駆り立ててより高次の段階の原理へと進め、最後に最終的な原理へと到着させる役割を果すのである。そして、これは正に学問的知識に伴う特性であって、経験的知識に伴うそれではない。後者は感覚に由来し、人間は感覚によって欺かれやすい存在であるから、それによって見出された因果関係は蓋然性にとどまってしまう。従って、それは論理的徹底化の要求に答える資格を有してはいないから、我々を中途半端な理解への途上に押しとどめてしまうのである。これに対して、前者は感覚ではなく、正確な定義と推論に依拠しているから、そこで発見された因果関係には必然性がある。従って、それは論理的徹底化の要求に答える資格を有しているから、我々を完全な理解への道に到達させてくれるのである。論理は経験的知識が築いた厚い壁を突き破って、真理の発見の旅に向って飛翔していかなければならない。そこで、こうして導入された論理的徹底化という観点から眺められたホッブズの自然状態論と自然権論の有する意義を浮彫りにしてみたい。

先ず、「自然状態」とは、一方において確かに現実にあった混乱と内乱を反映し、そこから得られたイメージの影響を受けていることに間違いはないが、内乱そのものとぴったりと重なってしまうわけではない。というのは、万人の万人に対する戦争状態——文字通り万人が孤立した諸個人に解体して、一対一で互いに戦い合うという状態——は、現実には生じえないからである。他方において、それはむしろ理論上考案され、作り出され、生成された「事実」である。つまり、それは論理的な思考実験の産物であり、分析的・総合的方法に基づいて発見された「事実」であって、主権が根底から崩壊し、人間が激しい情念に駆り立てられ、あくまでも自らの意見を善悪の判断の基準として行動すると想定した場合に、論理必然的に人間が陥る状態を「事実」として示したものである。従って、この「事実」は経験的知識によっては知ることができず、学問的知識によってはじめて知ることができる。結局、「自然状態」は論理的徹底化の気構の要請に従って、因果関係を発見する能力と定義を行う能力とが協力して作り出し、生成し、発明した「事実」である

と言ってよい。従って、それは抽象化されて把握された「事実」であって、学問的意味でのリアリティを帯びたものである。その意味で「自然状態」は、自らを疑うべからざる、争う余地のない、自明の「事実」として承認するよう我々に要求しているのである。それ故、こうした性格をもった「事実」が原理として確定されるのであるから、ホッブズの理論においては一般に原理そのものは、人間の経験的知識に訴えての論証を第一義的には必要としないのである²⁵⁾。

こうして、ホッブズは論理的徹底化の気構の下に「自然状態」を捉えることによって、人々に代ってそこにおける人間の行動の意味を極限にまでつきつめ、それによって、自らの行動の論理的帰結を不十分にしか自覚しない人々の前にその究極の帰結を示して十分な自覚を促そうとしたのである²⁶⁾。その意味で、「自然状態」は、完全な理解に到達するために論理的徹底化が自らを推進していく上で必要とし、依拠すべき「事実」であると言えることができる。

次に、徹底した権利意識をその内容としてもつ「自然権」は、論理的徹底化の要求に従って、自然状態から国家状態への必然的な移行を媒介する原理として位置づけられている。人間は自己の利益を赤裸々な暴力によって主張する場合もあるが、通常はむしろ、それを権利の名で正当化して主張するものである。ホッブズは、人々がこうした権利意識を徹底的に深化して抱くように期待している。なぜならば、単なる暴力による闘争の次元から権利の闘争の次元に移行すれば、そこでは権利は各人の私的な理性によって正当化されるから、学問の立場からそのような理性による権利の主張の論理的帰結を吟味して批判するという地平を開くことが可能になるからである。更に、権利をめぐる論争の質を学問の水準にまで高めることによって、自己の権利の一方的な主張が自己の権利の破壊という結果を導き出してしまうという論理的矛盾に陥ることを論証してやれば、人々は否応なしにその矛盾を承認せねばならなくなり、自然状態から国家状態への移行の必要性和必然性が誰の目にも明白になってくるはずである。この移行の必要性和必然性とは、権利意識に媒介されて気づかれるようになる。権利意識を抱き、権利をどこまでも徹底的に主張していけばいくほど人々はその不合理を覚り、共通の規範の必要性和必然性を思い知らされて、国家状態への移行を切望するようになる。ここに、ホッブズの自然権論の担っている意義がある。

こうして、学問的知識によって経験的知識を克服するという問題の意義が、自然状態論と自然権論の二点において、論理的徹底化の視点から解明されたのである。

四、 結 論

「コモンウェルスの目的や性質を徹底的に究明したことも、また、正確な理性で比較考察したこともなく、それについての無知から生ずる悲惨な状態に日々苦しめられている人々の実際の見地からだけの論証は、妥当性をもたない。(中略)コモンウェルスを作り、それを維持する技術は、算術や幾何学がそうであるように確実な規則によるのであって、テニスのように実地だけによるものではない。この規則は貧乏人達はそれを見出す暇がなく、たとえ暇のある人々でもこれまでそれを見出すための好奇心や方法をもったことがなかったのである²⁷⁾。」

ホッブズは、最初に確実な学問たる科学ないしは哲学を身につけた者としての誇りと自信をもって、これらの人々に代って国家の目的や性質を論証していった。その意味で、理性のもたらす成果に大いに期待をかけたホッブズは、人々に対する、更には国家に対する助言者としての役割を自覚し、それを担ったと言うことができよう。助言者の役割とは、助言を受け取る者にある行為の帰結を真に、明白に知りうるような仕方ですすこと、即ち、自分の助言を、真実を最も明白に表現しているような形の言葉にして提案することにある。それでは、助言者としての資格を保証する能力とはどのようなものであろうか。「助言する能力は、経験と長年に亘る研究の結果から生ずるものであり、いかなる人も大コモンウェルスの運営のために知っている必要のある、すべての事柄について経験を有しているとは考えられないから、いかなる人も彼が十分に知り尽くしているだけでなく、十分に省察し、考察してきた仕事についてのみ、立派な助言者たりうると考えられる。(中略)助言に必要な知力とは……判断力である。そして、この点についての人々間の差異は、それぞれの種類の研究や仕事について、人々がそれぞれに受けた教育の差異から生ずる。もしもあることを行うための無謬の規則(機械や建物における幾何学の法則のように)があるならば、世界中のあらゆる経験をもってしても、その規則を学んだ者、或いは発見した者の助言に匹敵しえない。こういう規則がない場合には、それぞれの性質をもった仕事に最大の経験を有する者が、それについての最善の判断力を有し、従って彼が最善の助言者なのである²⁸⁾。」こうして、助言者として必要な能力をもち、それ故人々に対して助言する資格を備えたホッブズは、正確な定義と推論に基づく科学ないしは哲学を樹立し、それによって平和の確立に至る一連の過程を論証してみせたのである。

ところで、先に私は、理性的推論に基づく論証は、第一義的には経験による証明を必要としないと述べたが、

第二義的な意味ではホッブズは経験による裏付けの必要性を主張している。ホッブズが自己の学問的論証を受け入れて貰うために行った一般の人々への説得は、経験的事実に基づく承認に訴えてなされている。自然状態が戦争状態に外ならないことを容易には理解しようとしないう人々に向って、ホッブズは「これらの事柄を十分に考慮したことのない人々は……情念を基にしたこの推論を信ぜず、それが経験によって確認されることを望むであろう²⁹⁾」と述べて、人が旅行する時には武装すること、家の中で金庫に鍵をかけること、その他の具体例を挙げて、人々が自分の経験に照して納得するように意を用いている。ホッブズがこのような試みを行った理由は、実は彼が彼の学問的論証に対する一般の人々の理解能力に懸念を抱いていた点にある。「我々は日々経験によって、あらゆる種類の人々の中に、食べることと安楽に暮すことだけに腐心しているような人々は、不合理なことを検討する労をとるよりも、むしろ不合理なことを信じて満足しているのを見る³⁰⁾」。

その意味で、ホッブズという希有の天才によって樹立されたその学問は、第一義的には学問的知識のレベルにおいて、第二義的には経験的知識のレベルにおいて、我々がそれを受け入れるように要請ないしは命令しているということになる。しかしながら、後者のレベルにおける受容が、所詮どこまでも現実の経験の世界に生きている一般の人々にとっては、むしろ第一義的な意味をもってくるのであって、つまるところホッブズもそのことを理解していたと思われる。それは、本来のホッブズの立場からすれば彼の現実への譲歩であったかもしれないが、けれどもそれは必要な譲歩であった。なぜならば、ホッブズの理論においては秩序を構築する本人は人々自らであるとされているために、論理上、彼の理論は人々から受け入れて貰う必要があったからである。

更に、一般の人々の理解能力に対するホッブズの不信ないしは悲観的な見方は、ホッブズがエリートの養成機関とも言うべき大学に期待感を抱き、自己の打ち建てた学問に基づいて青年を教化し、彼らに一般の人々への教導を行わせようとした点に、更にはそれだけでは安心することができず³¹⁾、最後には自己の学問が主権者の手によって実行に移されることを期待するに到った点にも表れている。ここに、一般の人々の理解能力に対する苦い思いが、いつまでもホッブズにつきまとうて離れなかったことが暗示されているように思われる。そして、このことはホッブズの理論におけるジレンマであるばかりではなく、同時にそれは近代市民社会の抱える基本的なジレンマでもある。

正確な定義と推論に依拠するホッブズの政治科学ないしは政治哲学は可能性についての技術という性格を有し

ているのであり、この学問的方法的意義は、ホッブズの生きた時代の終焉と共に消え去ってしまったわけではない。それは、状況は異なるとはいえ、我々の生きているこの現代社会においても、我々が権利をめぐる闘争を自ら解決して平和を樹立するという課題に直面した場合には、採用して依拠すべき学問的方法論としての価値を有している。その意味で、それは堅固な礎石としての普遍的な意義を保ち続けているが故に、我々はこれをしっかりと把握して受容しなければならない。本論文は、ホッブズの学問的方法是は広く万人にとって意義があるという見地から、それについての平易な注釈を目指して、万人に向けて書かれたのである。

註

- 1) 『名古屋工業大学学報』, 第36巻, 1984年。
- 2) ホッブズがこの言葉を使用しているわけではない。理性的推論という言葉に対して、便宜上、私は慎慮をそう呼ぶことにした。
- 3) ウォーリンも、確実で不変な知識は経験を排除すると述べている。シェルドン・S・ウォーリン『西欧政治思想史』III, (福村出版), 邦訳, 135頁。
- 4) The English Works of Thomas Hobbes of Malmesbury, vol. I, 1962, (以下, E. W. I. のように略記する), p. 3. 『物体論』においては、他のいくつかの箇所では定義し直されて示されている。なお、『リヴァイアサン』第四部における哲学についての定義を示そう。「哲学という時に理解されるのは、あるものの生成からそのものの諸特性へ、或いは諸特性からそのものの生成についての可能な方法への、推論によって獲得された知識のことであって、その目的は物質と人間の力が許す限り、人間生活が必要とする諸結果を生み出しうるようにさせる点にある。」E. W. III, p. 664. 邦訳, 『リヴァイアサン』, (河出書房), 451頁。なお、『リヴァイアサン』からの引用については、邦訳から訳文を引用した。以下、同様である。ただし、一部、訳文を改めた。
- 5) 以下の叙述については、E. W. II, pp. i-x x iv を参照されたい。
- 6) オークショットやワトキンスが指摘しているように、近代科学革命はホッブズの哲学に大きな影響を与えている。
- 7) 確実な学問としての幾何学の有する意義について、ホッブズは次のように述べている。「もしも、あることを行うための無謬の規則(機械や建物における幾何学の法則のように)があるならば、世界中あらゆる経験をもってしても、その規則を学んだ者、或いは発

- 見した者の助言に匹敵しえない。」E. W. III, p. 247. 邦訳, 172頁。
- 8) この場合の正確な定義とは、カッシーラーが概念についての原因論的定義と呼ぶものである。E. カッシーラー、『啓蒙主義の哲学』, (紀伊国屋書店), 邦訳, 314-15頁。
- 9) 藤原保信『近代政治哲学の形成』, (早稲田大学出版部), 53頁。
- 10) 従って、ホッブズにおける定義の性格については、重松氏が「…定義は、新なる名目を用ふるに際してその意味を単に説明するものに過ぎない。それは認容されるか否かを論議される必要はない。つまりそれは真でも偽でもないものである。随って総ての結論は、それ自体には真でも偽でもない任意に構成された定義からの単なる論理的帰結に過ぎないが故に、一切の知識は恰も将棋の問題を解く遊戯も同然となるであらう。」というテイラーの言葉を引用しながら指摘しているような批判を被る余地が出てくるであろう。重松俊明『ホッブズ』, (弘文堂書房), 114頁。
- 11) E. W. II, p. 16n. 定義の詳細は次の通りである。「自然状態における人間の正しい理性を、私は多くの人々と違って、絶体確実な能力のことではなく、推論という行為のことであると理解している。それは自分の隣人に対して損害か利益かの、どちらかの影響を及ぼす行為についての、各人の有する特別の、真の理性的推論のことである。私はそれを特別のと呼んだが、その理由は次の通りである。つまり、政治的支配においては至高者の理性、従って市民法が個々の臣民によって正しいものと受け取られるべきであるけれども、この政治的支配が存在しないならばそのような状態においては誰も正しい理性を誤った理性から区別することができないが故に、正しい理性を自分自身の理性と比較することによって、各人の理性が自分自身の行為(それは自分の危険を賭してなされるが)の規則であるばかりでなく、自分に関係のある事柄においては他人の理性の尺度ともなると見なすからである。更に、正しく構成された原理から結論づけられているから私はそれを真のと呼ぶ。その理由は、自然法に対する侵害は誤った推論から、或はむしろ、自分自身を保存するために他人に対してどうしても遂行しなければならない義務を理解しようとはしない人々の愚かさから生ずる点にある。」
- 12) 日本においては、岸畑、藤原の両氏によって、ホッブズの学問的方法が彼の全哲学を、従って政治哲学をも貫いていることが指摘されている。岸畑『ホッブズ哲学の諸問題』(創文社)、藤原、前掲書を参照されたい。
- 13) E. W. I, p. 8.
- 14) E. W. III, p. 94. 邦訳, 73頁。
- 15) 以下の叙述については、次の箇所を参照されたい。Ibid., pp. 1-35. 邦訳, 13-35頁。
- 16) 以下の叙述については、次の箇所を参照されたい。Ibid., pp. 38-53. 邦訳, 37-47頁。
- 17) 福田歓一『近代政治原理成立史序説』, (岩波書店), 256頁。
- 18) 福田, 前掲書, 257頁。
- 19) 岸畑氏は、「感覚能力に含まれている想像力が表象群を素材にして、すでに因果的関連の下に思考を連続せしめ、結果の原因、または原因の結果等を探求する能力であり、発見の能力である」とし、従って「想像力は感覚を理性へ媒介する役割をもつといえる」と指摘している。岸畑, 前掲書, 31-32頁。
- 20) 適切な定義を与える人間の能力のことを、現代人たる我々はおそらく、直観力と呼ぶかもしれない。
- 21) E. W. VIII, p. vii.
- 22) 佐藤氏も、ホッブズの序文における叙述には、因果性の観念がはっきりと現れていることを認めている。佐藤正志「歴史における真理と修辞——初期ホッブズにおける方法の問題——」, 渋谷浩編著『啓蒙政治思想の形成——近代政治思想の研究(I)——』(成文堂)所収, 63頁。
- 23) 以下の叙述については、次の箇所を参照されたい。E. W. III, pp. 85-86. 邦訳, 67頁。
- 24) Ibid., p. 85. 邦訳, 67頁。
- 25) それでは、原理の正しさは、従ってまた、定義の正確さは何によって保証されるのであろうか。それは結局のところ、こうした原理に依拠するホッブズの政治哲学は、他人の熟考に依存していると言うほかはないであろう。この点に関しては、次のホッブズの言葉が参考になる。「…私が自分の研究を整然と明快に書き記してしまえば、他の人に残された苦勞はただ、彼もまた自分自身の中に同じことを見出さないかどうかをよく考えてみることだけであろう。この種の学説には、これ以外の論証は不可能だからである。」Ibid., p. x ii. 邦訳, 12頁。
- 26) 岸畑氏は次のように指摘している。自然状態を「万人の万人に対する戦」と規定することによって彼(ホッブズ)が言わんとしたことは、「すべての人間が悪であること」、すなわち、だれ一人として局外に立つことを許さぬ人間の悪——悪をなす行動は勿論のこと、行動への身構えをも含む——の普遍性である、と。岸畑, 前掲書, 213頁。
- 27) Ibid., pp. 195-96. 邦訳, 139-40頁。

- 28) Ibid., pp. 246-47. 邦訳, 172頁。
- 29) Ibid., p. 114. 邦訳, 85頁。
- 30) Ibid., p. 658. 邦訳, 448頁。同趣旨の言葉が pp. 195-96, 邦訳, 139-40頁にも見られる。
- 31) 「科学は小さな力しかもっていない」と, ホッブズは嘆じている。Ibid., p. 75, 邦訳, 60頁。